

博士課程教育リーディングプログラム 事後評価結果

機 関 名	東京工業大学	整理番号	C03
プログラム名称	情報生命博士教育院		
プログラム責任者	三原 久和	プログラムコーディネーター	秋山 泰

博士課程教育リーディングプログラム委員会における評価

[総括評価]

計画どおりの取組が行われ、成果が得られていることから、本事業の目的を達成できたと評価できる。

[コメント]

リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、生命系と情報系をまたいだ学位プログラムが構築され、2つの系のいずれかを主専門、他方を副専門とするΓ（ガンマ）型人材の育成を目指した様々な取組が実施された。一部教員の本プログラムへの理解が不足している、博士課程に進学する学生が少ないなどの点はあるものの、本プログラムを担当する教員の適切な配置や学生への経済的支援、当初から非研究者の道を強制せず学生の自主性を尊重して多様な進路を示すなど、大学としてのサポート体制は適切に整えられている。その結果、学生は目的意識を高く持って本プログラムに意欲的に取り組んでおり、高い専門知識と幅広い見識、更にグローバルリーダーの資質を持つΓ型人材が社会に輩出されはじめていることは高く評価できる。

修了者の成長とキャリアパスの構築については、学生のスキルの向上を6軸（リーダーシップ、コミュニケーション力、ビジネス能力、インターンシップ経験、副専門、主専門）で定量的・総合的に自己評価できる仕組みを導入し、コミュニケーション力の向上や国際性を身に着けることを目的とした海外インターンシッププログラムや、学生自身が主体となる各種イベントの実施など、学生の多方面の能力の向上を促す様々な取組が行われた。その結果、学生によるベンチャー企業の創業や多くの修了者が産業界で活躍するなど、当初想定した多様なキャリアパスを歩む人材の育成が進みつつあり、高く評価できる。

事業の定着、発展については、新たに設置される「リーダーシップ教育院」を全学共通のプラットフォームとして、本プログラムによるグローバルリーダー養成教育の諸成果を継続・活用する計画が示されている。しかしながら、「リーダーシップ教育院」の位置付けや内容、現プログラムからの移行プロセスについての具体性に懸念が残ることから、移行にあたっては本プログラムで得られた優れた成果が次期体制に十分に継承されるように配慮していただきたい。特に、奨励金等の学生への経済的支援に関しては懸念が残ることから、これまでと同等の明確かつ合理的な支援が継続されるように、リソースの確保を含めた全学的な努力が求められる。